



C.M.D - case VI-

The break part

qedqed

「それはどういうことなんだね？犯人が分かったということなのかね？」

そらっちのお父さんは驚いた声で言った。やまっちもうみっちも驚いた顔をしている。

「はい。証拠はありませんが、私は確信を持っています。」

「犯人は誰なの？」とやまっち。

「六畳だと思う。」

「えっ！？どうして、六畳は或真多さんに振られたんだよ。命がけで復讐する理由がないんじゃないの？」

やまっちの反論はもっともなものだ。ただ、彼が命がけだからこそ、私は確信を持ったのだ。

「順を追って説明したいけど、早くひめ姉を助けたい。だから・・・。」

「分かっているよ。すぐに六畳の所在を確認して、お父さん！」

そらっちは父親の顔をまっすぐ見据え、そう言った。

「分かった。君たちは少しここで待機していてくれ。」

ここで、私たちは小休止。私もやまっちもものすごい疲労感が襲ってきた。

そのため捜査員が調べている間、空きスペースで休ませてもらうことにした。

そらっちは私たちのために飲み物を買ってきてくれた。こういう女性らしい心遣い見習いたいものだ。

場違いに思いながらも、そうつぶやき、皆で笑い合った。

待っている間、スマホで書き込み状況を確認していた、その時1本の電話が総本部に鳴った。

電話を取った捜査員が興奮気味に報告する。

「本部長！先ほど人質のひとりが交番に駆け込んできたそうです！」

「何！？」

うみっちのお父さんは大きな声を上げた。もちろん、私たちも。

「それで、人質は全員無事なのか？一体何が起こったんだ？」

「詳細は分かりませんが、電話をしてきたのは海水ひめじ。人質は全員無事。外傷もないそうです。しかし、犯人は銃で自殺。」

ひめ姉は無事。その瞬間、私はその場にしゃがみ込んだ。

やまっちとそらっちが私を抱きしめてくれた。

「良かったね！」

「ほんとに！」

「ありがとう。」

私たちは一様に安堵した。そらっちのお父さんも穏やかな表情で私たちを見ている。

ただ、そらっちのお父さんの仕事はまだまだこれからだ。

「それで、犯人はもう判明したのか？」

そらっちのお父さんは再び厳しい表情に戻った。

「いえ、まだです。ただ、現場の警官から画像を送ってもらいました。或真多さんの事件の容疑者の中にいるのであれば、この中に分かる者がいるかもしれません。」

捜査本部にいる者が一斉にスクリーンに映し出された犯人の顔を見る。

心臓を打ち抜いたようで、顔に傷はなかった。

「六畳 間だ！」

何人かの捜査員から声が上がる。犯人についての私の推理は当たっていた。

「とりあえず、私はこれから現場に行くが、君たちも一緒に行こう。お姉さんにも早く会いたいだろうし、海水さんが何故に六畳が犯人ということに行きつuitたのか。それも早く知りたい。」

「分かりました。私も早く姉に会いたいのので、その申し出はとても有り難いです。」

私たち3人はそらっちのお父さんとパトカーに乗りこんだ

現場は大阪府警から車で1時間ぐらいの工場跡らしい。

「で、君の推理を聞かせてもらおうか。」

「はい。まず、私が違和感を持ったのは仮面の者が或真多さんの事件を知り過ぎていたことなんです。」

「どういうこと？よく調べてることはよく調べているとは思うけど？」とやまっち。

「うん。確かに調べれば分かることもあるよ。でもね、犯人じゃないと分からないことも言ってたんだよ。」

「えっ？どういうこと？」

「まず、仮面の者は或真多さんの事件が起こった時間をこう言ってたの・・・午後11時37分って。でも、そらっちのお父さんから聞いた警察の見解は午後11時30～45分頃。警察より正確な時間を言っていた。」

「そう言われると確かにそうだけど、それだけじゃあ・・・」とやまっちが何かを言いかける。

「うん、口から出まかせっていう可能性もあるよ。でも、他にもあるんだよ。」

「他にも？」

「うん。ひめ姉の店から11分の場所が事件現場とか、被害者に関しても不意打ちを食らってとか、犯人を見ていないと断定していたりね。」

「なるほど、そう言われてみれば確かに詳しすぎるな。」とそらっちのお父さんが口を挟む。

「それに、これだけ入念に調べているのにアリバイの有無を調べていないのはおかしいと思うの。」

「あっ、確かに！」やまっちはポンと手を叩いた。

「多分、アリバイがあるのは分かっていた上で、それでもそれなりの容疑者を確保したかったんだと思う。それが犯人の計画にはどうしても必要だった。」

「う～ん、分からないことだらけだよ。それに動機は何なの？実際に命を落としたぐらいの復讐だよ。或真多さんと深く愛し合っている者の犯行だと私なら思うんだけど、彼は或真多さんに振

られた人間だったよね。どちらかというとな犯人像とは真逆だと思うんだけど。そもそも、自分で殺そうとしてたのにどうしてこんなことを？」

そらっちもたまらず口を挟む。

「犯人の目的は”目を覚ました或真多さんのヒーロー”になることだったんだと思う。」

「ヒーロー？」

「うん。六畳は彼女に対してメッセージを残している。『彼女が目を覚ました時、私は彼女にとって永遠のヒーローになっているだろう』って。ふたりともミスチルが好き。そして、ミスチルには”HERO”という曲がある。」

「確かにあるね。」

「そして、或真多さんは犯人の顔を見ていない。それは六畳が言っているので、実際にそうなんだと思う。或真多さんは間もなく目覚める。その時に今回の事件を知ったらどう？六畳は自分の人生と引き換えに敵をとってくれた人として、彼女の中で永遠に残るはず。歪んだヒーローとしてだけ。」

「そんな・・・」とやまっち。確かに信じられない気持ちは分かる。

「確かににはわかには信じがたい動機だな。六畳は彼女のことを表面上だけはあっさり諦めたふりをして、内部ではその歪んだ心を増幅していったってことになるわけだが・・・。」

そらっちのお父さんも半信半疑だ。

「私も戸惑いました。でも、仮面の者はこんな言葉も言っていました。」

私は仮面の者の言葉を反芻した。

「『君たちの書き込みに敬意を表し、全てに目を通すつもりだ』

『その者が真犯人かどうかは重要ではない』」

私は皆の顔を見回し、話を続けた。

「仮面の者が示した10分間で全ての書き込みに目を通すなんて、今の投稿数を見たら絶対に無理だよね？こんな予測できたはず。つまり、目を通す気は最初からなかった。そして、円卓の容疑者が犯人でないことも最初から分かっているのだから、真犯人かどうか関係ない。でも、国民みんなが選んだ”真犯人”を殺すことで、大義名分を得ようとした。さっきも言ったように或真多さんが目を覚ました時、彼は国民が認めた真犯人を殺した”ヒーロー”になっている。或真多さんの気持ちに関係なく。」

「そんな自分勝手な考えで、ひめじさん達を・・・。」

やまっちはその後の言葉を継げなかった。そらっちも・・・。

「確かに突拍子もない動機だが、六畳が犯人と分かった今、その推理も信ぴょう性があるな。ただ、思いを遂げる前に自殺した理由は何なんだろう？君の推理も彼には届いていないわけだし。」

そらっちのお父さんは冷静に分析していた。

「日本中には私みたいな探偵気取りがいっぱいいるってことですよ。」

訝しがるそらっちのお父さんにスマホの書き込みを見せた。

「なるほどな。」

つぶやきアプリselfishには、私と同じ推理を展開した人が大勢書き込みをしていた。

「こんな劇場型犯罪を展開したら、そりゃこうなるよな。六畳はこれを見て観念したってことか。策士策に溺れるってところか。」

そらっちのお父さんも大きくため息をついて、こう続けた。

「解答は永遠に謎のままかもしれないがな……………」

1時間後、私たちはひめ姉と再会。抱き合い、お互いのぬくもりを感じ取った。

ひめ姉は何も言わない。でも、頭を撫でてくれた。

幼い頃から変わらない。”よくやったね！”のサインだ。

結局、そらっちのお父さんの言葉の通り、真相は闇へと消えた。

ひめ姉を含む”円卓の容疑者”から聞き込みもしたが、動機については不明のまま。

私の推理が合っているのかも永遠に分からないだろう。

事件発生から数日後、ひめ姉とクラシックコンサートを鑑賞しに行った。

ひめ姉はもうすっかり元気だが、心に負った傷は消えない。

でも、少しでも元気になってもらいたいと誘ったのだ。

コンサート終了後、ひめ姉はこんなことを言った。

「今日はありがとうね。特にバイオリンの演奏が素晴らし……………」

急にひめ姉は黙り込んだ。

「どうしたの？」

「そういえば、犯人のあいつ。自殺する直前、モバイルで何かを読んでいたのよ。」

「えっ!？」

それは私の推理を覆す証言だ。私の思ったことを察してか、ひめ姉は言葉を継ぎたす。

「あっ、犯人についての呼びかけの投稿を、じゃなくて別のものだと思う。あいつ自身も打ち込んでたしね。それで、私はあいつの横の席だったから、独白が耳に入ってきたの。」

「なんて？」

「『バイオリンの勝ちか』って。その後、モバイルを文字通り破壊して自殺したの。」

『バイオリンの勝ち』

この言葉が今回の事件が単なる序章であり、大きな意味を成すことを私はまだ知らなかった。